

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	巨人たちの潜む海：『オデュッセイア』から『夷堅志』『青邱野談』まで
Author(s)	高西, 成介
Citation	中國中世文學研究, 63-64 : 273 - 290
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051463
Right	
Relation	



巨人たちの潜む海

—『オデュッセイア』から『夷堅志』『青邱野談』まで—

高西成介

はじめに

中国には、古くから巨人をめぐる伝承が伝わっている。それらは大別すると、次の三つに分類することができるように思われる。

- (1) 創世神話に見える巨人
- (2) マレピトとしての巨人
- (3) 異国の住民としての巨人

まず(1)の創世神話に見える巨人であるが、中国において世界を創造したとされる神の一人である盤古を、その代表として挙げることができよう。盤古は、天地未分化であった世界を二つに分ち、頭で天を支え足で地を踏ん張って、天地が再び合するのを防いだ巨人である。また、盤古の死後、彼の体の一部は太陽、月、山川などに變化し、世界が誕生したとも伝えられている。²⁾このように世界の始原に現れた巨人、それが盤古であった。

次に(2) マレピトとしての巨人である。世界の混乱

の先触れとして、ふらりと現れる巨人がいた。例えば、『漢書』には、始皇帝二十六年に夷狄の服を着た身長五丈の巨人が十二人、臨洮に現れたことが記されており、これはその後の混乱の予兆であるとされている。³⁾最後に(3) 異国の住民としての巨人である。中国の域外には、様々な場所とそこに暮らす人々が夢想された。例えば『列子』湯問篇によれば、「龍伯国」という巨人が住まう国が北の果てにあり、数歩で五山に至るほどであるという。⁴⁾また、『博物志』卷二に引く『河図玉板』によれば、その身長は三十丈(約69m)であった。⁵⁾

このような巨人国は、これ以降さまざまな文献に見ることが出来る。国だけではない。中国の域外には、巨人が暮らす謎の島も存在した。そこで本稿では、中国における巨人伝承の中から、異国の住民としての巨人をめぐる説話に注目し、論じてみたい。筆者はこれまで、こうした巨人をめぐる、「東海異界小考」(勝山稔編『小説・芸能から見た海域交流』汲古書院、二〇一〇年)や「中国古伝承のなかの海」(静永健編『海がはぐくむ日

本文化』東アジア海域に漕ぎだす6、東京大学出版会、二〇一四年）でも論じてきた。本稿はそれらに続くものである。

一 巨人の島

巨人の住まう島について、最も整った記述は、次に挙げる『夷堅志』乙志卷八「長人国」であろう。少し長いので、以下に全訳を掲げる。

明州の人が航海中に、暗い霧があたり一面に広がり、強い風が吹き始めるのに会い、船がどこに向かっているのかわからなくなつた。空が次第に晴れてくると、ある島に流れ着いていたのであつた。二人が刀を持つて岸に上がり、薪を切ろうとしたところ、百歩ほど離れた所に竹の籬まがきがあるのを見た。その中に入つてみると、野菜畑となつているのが見え、人が近くにいますと思つた。そこでしゃがんで野菜を摘み取ろうとしたところ、突然手を打つ音を聞いた。これを見たところ、一人の巨人がおり、その背の高さは三、四丈を越え、歩くさまは飛んでいるかのようであつた。二人は急いで走り帰つたが、そのうちの一人が少し遅れ捕らえられてしまった。巨人は指を伸ばしその肩に穴を開け、大きな藤でその穴を貫き、彼を高い樹に縛り付けて立ち去つた。しばらくして頭に一つの鍋をのせ再びやつてきた。その人は

こずえからこの様子を見ていて、巨人が自分を今にも煮て食べようとしているのを知り、たいへん怖れた。その時になつてやつと腰の間に刀を持つていたことを思い出し、刀を取つて藤を切るうとしたが、痛みに耐えて力を振りしぼつて、やつと断ち切ることができた。急いで船に乗つても綱を切つた。岸をすでに遠く離れていても、巨人は海に入つて追いかけてくること、まるで平地を歩いているかのようにあつた。水はかろうじて腰に届くくらいで、かくして前に出て船をつかまえようとした。強力な石弓で巨人を射たものの退かない。ある者が斧を手にしてその手を切りつけ、指を三本切り落とすところ、その指は船の中に落ちたが、そこでやつと指を棄てて（彼らのことを）打ち捨てて立ち去つた。指はたれるきようであつた。徐競、字は明叔はかつてこの指を見たことがあると言つていた。何徳献語る。

本話の構造を整理すると、次のようになる。

(i) 航海の途中に遭難してある島に流れ着く。上陸して巨人に出会う。(遭難と巨人との邂逅)

(ii) 急いで逃げるが、捕まってしまう。巨人は人間を食べようとする。(捕縛と食人)

(iii) 巨人のもとを逃げ出して、船に戻り出航する。(脱出)

(iv) 巨人が追いかけてくる。(追跡)

(v) 追いかけてくる巨人に武器で対抗し、巨人の指を切り落とす。(武器での抵抗と指の切断)

この「長人国」の話にあつて注目すべきは、(ii) 巨人による食人と(v) 武器で抵抗し、巨人の指を切り落とすという二つのモチーフである。では、こうしたモチーフは『夷堅志』以前にも中国で語られていたのであろうか。

先に挙げた『列子』湯問「龍伯国」は、最も古い巨人をめぐる記述の一つであるが、そこには巨人の詳しい生態についてはほとんど記されていない。また、『山海経』大東荒経には、

東海の外、大荒の中に山があり、名を大言という。日月の出るところである。波谷山という山があり、そこには巨人の国がある。巨人の市があり、その名を「大人の堂」という。一人の巨人がいて、その上にうずくまつて、その兩耳を広げている。⁸⁾

と巨人について記されており、これに付された郭璞の注には、平州別駕の高会が語った事として、

倭の国の人がかつて航海していたところ、風に流されて大海の外に出てしまい、ある国の背丈がみな一文あまり、姿形が胡人に似ているのに出会った。⁹⁾

とある。これらはすべて、巨人の国が海上に存在していることを示唆しているが、外見上の特徴以外は、ほとんど触れられていない。¹⁰⁾

こうした状況は、唐代に入ると少しずつ変わっていく。まずは、盛唐の牛肅によつて書かれた小説集『紀聞』に見える話を見てみよう。

新羅国は東南で日本と隣り合わせ、東に長人国と接している。長人は身の丈が三丈、のこぎりのような牙にカギのような爪で、火を通したものは食べず、禽獣を追いかけて食べ、時にはまた人をも食べる。身体を露出しており、黒い毛が身体を覆っている。その国の境には山が連なること数千里に及び、その中に溪谷があり、その地守るために鉄門が設けられていた。これを鉄関という。いつも弓弩数千を用いてこの地を守り、このためにこの地を通り過ぎることはできないのである。¹¹⁾

この話では、日本や新羅の近くに巨人の住む国(長人国)があることが語られているが、漂着譚ではなく、異国の事情のみが書かれており、書き方は前述の『山海経』に近い。しかし、この話では、これまで書かれなかった巨人の特徴である巨人が人を食らうことが、はっきりと記されている。中国において、巨人が人を食らうことについて書かれた最も早い時期のものであろう。

また、同じく『紀聞』にもう一話、巨人をめぐる話が収められている。

天室のはじめ、賛善大夫魏曜が新羅に使いするにあたって、曜は年をとっていたのでこの使いをたいへん怖れた。そこで、かつて新羅に行ったことがあるという客人に、そのルートを相談したところ、客は次のような話を聞かせてくれた。「永徽中、ある人が新羅に使いし、さらに日本に向けて出発しようとしていたところ、海中で風に遭い、数十日の間漂流し、ある海岸にたどり着いた。同じような船があり、その者たち百人あまりと岸に登った。岸の高さは二三十丈、家屋が見え、駆け出したところ、巨人があらわれた。身長は二丈で身体には衣服をまとい、言葉は通じなかった。中国人がやって来たのを見て、大変喜んで家の中に連れて行き、門を石でふさいで出て行き、仲間百人ほどとつれだつて戻ってきた。そして、肌や身体が十分肥えている者を五十人あまりを選び、みんな一緒に彼らを煮て食べ、酒を飲んで宴会を行った。夜がふけるとみんなは酔っぱらい、めいめい家に戻っていった。後ろの建物には三十人の女性がいたが、みな同じように漂着し囚われたものたちであった。彼女たちによると、男はみな食べられてしまい、女は留め置かれ、服を作らさされているということであった。彼女たちの助けを得て、

みなその地を逃げ出したが、婦人たちは絹や糸を数百匹取り出してこれを背負い、刀で酔っている巨人の首を掻き切った。そして苦労して海岸にたどり着いた。夜が明け船が出発するに及んで、千人あまりの巨人たちが追いかけてきたが、船にはたどり着けなかった。そうして、使者と婦人はともに帰りつくことができたのであつた」(要約)

この話では、単に巨人の国について語るのではなく、ある人の巨人の島への漂着とそこからの脱出が詳しく書かれている。おそらく、本話はこうした巨人の島への漂着譚のもつとも早い時期のものであろう。しかし、先に挙げた『夷堅志』『長人国』の話と比較すると、(v)「武器での抵抗と指の切断」というモチーフは、まだ語られていない。

続いて、成立時期が『紀聞』より三〇年ほど下る、戴孚『広異記』に見える「張騎士」の話を見てみよう。

張騎士が若い頃李勣の供をして航海をしている途中、大風が吹いて流され、さらに巨大な蛇の怪物に船を押されて漂流する。その途中でとある島にたどり着くが、その島に上陸すると、大きな門があり、門を叩いてみると全身に白い毛が生えた、身の丈数丈の人が出てきて、「一緒にいた二人を食べてしまう。張騎士だけが一人船まで逃げ込むが、白い毛の人が

追いかけてきて、船の纜とらなを引つ張る。船の者たちは弓を射たり刀で切つたりして、ようやく手を離させた。それからまた流されてたどり着いたのは南海郡清遠県に属するという島であった。⁽¹⁴⁾ (要約)

この話も、人を食う巨人の島への漂着と、そこからの脱出を語るものである。先の『紀聞』と比較するならば、追いかけてきた巨人を弓や刀などの武器を用いて追い払うことが、新たに語られている。しかし、「指を切り落とす」モチーフは含まれておらず、(v)「武器での抵抗と指の切断」のうち、抵抗のモチーフだけが語られている。

では、さらに時代を下り、五代初期に王仁裕によって書かれた『玉堂閑話』に収める話を見てみることにしよう。

六軍使の西門思恭は、かつて命を受け新羅に使いしたが、遭難してにわかには南のとある岸辺にたどり着いた。陸にあがると突如一人の身の丈五六丈の巨人が現れた。巨人は西門思恭を五本の指でつまみ上げて手に持ちながら百里あまりを行き、一つの岩穴の間に入っていく。すると老いも若きも多くの巨人が先を争うようにやって来て思恭を眺めたが、彼らの言語は全く理解することはできなかった。彼らはみんな飲んでいる様子で、まるで珍しいものを手に

入れたかのようにであった。そして穴を一つ掘り思恭をその中に置いて、またやって来ては彼を見守るのであった。

二三日して、とうとうその穴から脱出した。もってきた道に戻りやつと船に飛び乗ったが、巨人はずでに追いかけてきており、彼らの船に追い付いて、すぐに大きな手で船をよじ登ってきた。ここにおいて剣を振るい、三本の指を切り落としたが、指はほぼ今の槌帛棒(絹織物をたく棒)のようであった。巨人は指を失って退いて行き、かくして纜とらなを解いた。船の中の水や食糧は尽きてしまい、一ヶ月もの間食べ物は無く、身に付けている衣服を噛んでこれを食べたのである。

後に北の岸に達することができ、西門思恭は三本の指を献上したが、漆塗りにして皇宮の蔵に収蔵された。⁽¹⁵⁾ (要約)

この話もまた、巨人の島への漂着譚であり、これまで見てきたものと話の構造は、ほとんど同じである。ただ、巨人が人を食うことに関しては、明確に書かれていない。とはいっても、巨人たちが人間を捕らえ穴の中に入れているのは、その後食べようとしているからだと考えられる。おそらく、ここで語られる巨人たちも、人を食らう存在なのであろう。

また、本話でもっとも重要なのは(v)「武器での抵

抗と巨人の指の切斷」のモチーフが完全な形で語られていることである。管見の及ぶかぎりでは、本話が「巨人の指を切斷するモチーフ」が見られるもつとも古い話である。この「指の切斷」のモチーフは、唐末から五代にかけての時期に語られるようになった、比較的新しいものであるということができるのでないだろうか。

以上、本節では、中国における巨人説話の変遷を整理してきた。そもそも中国には、域外に巨人の住む場所があるという伝承が古くからあつた。それが、盛唐の頃になると海洋漂着譚として、巨人の島に漂着する話が語られるようになり、徐々に新しい要素が加えられ、内容が豊かになり、『夷堅志』『長人国』に見られるような話へと発展していったのである。

では、なぜ盛唐の頃からこうした話が語られるようになったのであろうか。そのことを考える前に、少し目を中国の外に向けてみることにしたい。

二 西方世界における巨人の島漂着譚

前節では、宋以前の文献から巨人をめぐる話を取り上げ、その変遷を見てきた。しかし、こうした巨人をめぐる話柄は、中国以外の地域の説話にも見ることができ。例えば志村五郎氏は、『夷堅志』丙志卷六「長人島」について、次のように述べる。

これは明らかにギリシア神話にあるオデュッセウスの

航海の途中に出会った一つ目の巨人キュクロプスの物語に基づいている。¹⁶

志村氏は、『夷堅志』に見える巨人説話は、「西方から渡来した話」であることを指摘し、その源流が『オデュッセイア』¹⁷であることを示唆される。では、果たして中国における巨人説話は、遠く西方から伝来したものなのであろうか。本節では、『オデュッセイア』や『アラビアン・ナイト』等の西方の説話を取り上げ、考えてみることにしたい。

では、まず『オデュッセイア』を取り上げる。伝承によれば『オデュッセイア』は、ホメロスという盲目の天才詩人が、『イリアス』とともに前八世紀に作った、主人公オデュッセウスの漂泊と帰国をめぐる物語である。とはいえ、その作品が正確にいつ作られたのか、またホメロスという詩人が実在したのか、などに関しては様々な議論があり、いまだ決着していない。¹⁸

その『オデュッセイア』第九歌では、オデュッセウスがキュクロプス¹⁹という一つ目の巨人が住む島を訪れる冒険譚が歌われる。その内容は、次のようなものである。

オデュッセウスがキュクロプス族の国に到達する。

オデュッセウスは部下と共に、その地を調べに向かう。すると、海に近い高みに洞窟があつた。そこには、

雲を突くが如くの巨大な男が一人で羊や山羊の世話

をしてゐる。オデュセウスたちは、その男に捕まつてしまふ。その巨人は、部下を食べてしまふ。

翌日夕暮れになって、家畜を追いながら帰つてきた大男に、オデュセウスは酒をすすめて酔わせ、そして、自分の名を「誰もおらぬ」だと告げる。泥酔して眠りこけたキュクロプスの一つ眼に、部下たちが先を尖らせ、火で真つ赤に熱したオリイヴの丸太を突き刺した。

痛みに苦しむキュクロプスは、周囲の仲間に助けをもとめたが、オデュセウスの告げた「誰もおらぬ」という偽りの名前のせいで、仲間は立ち去つてしまふ。キュクロプスは痛みに苦しみながら戸口に座り込み、オデュセウスらを出て行かせないようにしたが、オデュセウスらは家畜の羊を利用した機転によつて、脱出に成功する。

船にたどり着いたオデュセウスらは、出航する。大声で呼べば聞こえるほどの距離まで離れた時、オデュセウスはキュクロプスに呼びかけて嘲る。

キュクロプスは怒り狂い、巨大な山の頂きをもぎり取つて船に投げつける。危うく舵の先端に当たるところであった。落下した岩のために海水が盛り上がり、大波が起こつて逆流し、忽ち船を陸地に向けて運んでゆき、浜に打ち上げそうになつた。必死に漕いで、また陸地から遠く離れるのであつた。

オデュセウスによつてキュクロプスが盲目になる

ことは、かつて予言されていたことであつた。キュクロプスは、ポセイダオンにオデュセウスの今後が苦難に満ちるよう祈願する。²⁰（要約）

これは、巨人の住む島への訪問とその地からの脱出というモチーフを持つ、現在確認できる最古の物語である。²¹物語の構造は、次のようになつてゐる。

(i) 航海の途中ある島にたどり着く。上陸して巨人に出会う。(巨人との邂逅)

(ii) 捕えられ、巨人に食べられる。(捕縛と食人)

(iii) 巨人のもとを逃げ出して、船に戻り出航する。(脱出)

(iv) 巨人が追いかけてくるが、脱出に成功する。(追跡)

この構造を、例えば前節で見た『夷堅志』『長人国』の話と比較すると、(v)「武器での抵抗と指の切断」のモチーフは語られていないものの、基本的な物語の構造はよく似ている。しかし、その細部に目をやった場合、二つの話の間には相違点も多い。例えば、キュクロプスは一つ目であるが、『夷堅志』に見える巨人は一つ目ではない。また、(iii)「巨人のもとから脱げ出す」場面は、『オデュッセイア』では一つの山場となつてゐる。そこには、「巨人を酒で酔わせる」「巨人の目を潰す」「羊を利用して脱出する」など、興味深いモチーフがいくつ

も語られている。ところが、『夷堅志』では、『オデュ

『ツセイア』ほど詳細に脱出の場面は語られず、そのモチーフも共通していない。やはり、前八世紀に成立したとされる『オデュッセイア』と、十二世紀に作られた『夷堅志』との間に、直接の影響関係があったと断じるのは難しいだろう。

では、他にもこうした巨人の島漂着譚はないのだろうか。そこで思い出されるのが、シンドバードの物語である。続いて『アラビアン・ナイト』所収の「海のシンドバードの物語」を見てみることにしよう。巨人の住む島への漂着が語られるのは、「海のシンドバードの第三航海の話」である。⁽²²⁾

シンドバードが乗った船が流されて、猿そっくりのザギブ（毛人）の住んでいる山のそばへと流される。そこで猿の群れに襲われ、彼らに船を奪われ島に置き去りにされる。その島の真ん中あたりで、一軒の人家を見つけ中庭に入り込む。しばらくの間中庭に座っていると、やがて日没まで眠ってしまう。そこに、色は真っ黒けで、図体はあたかもナツメ椰子の巨木のように長大な生き物が、館のてっぺんから降りてきた。

シンドバードらは、その巨人に捕まってしまう。巨人は一人一人さわたりひっくりかえしたりして調べたあげく、船長を串焼きにして食べてしまう。

その後連日、巨人はシンドバードの仲間を一人ず

つ食べては石のベンチで眠り込んだ。シンドバードは仲間と相談し、巨人が人を食べて眠りこけている間に、立てかけてあった鉄串二本を火で焼き、力を合わせて巨人の両目に突き刺した。そうして、シンドバードらは脱出に成功する。

巨人はさらに巨大で形状も獐猛なめすの怪物を引き連れて戻ってきた。シンドバードらは小舟の綱を解いてそれに飛び乗って海上に押し出すが、巨人は手に手に巨石を持って投げつけ始める。仲間の大部分は石に打たれて死に、三人だけが生き残った。

一読して明らかのように、この「シンドバードの物語」は、『オデュッセイア』とよく似ている。脱出の場面で見られる「巨人の目を潰す」モチーフ、追いかけてきた巨人が「巨石を投げる」モチーフなど、共通している部分も多い。「シンドバードの物語」が『オデュッセイア』から何らかの影響を受けていることは間違いないだろう。⁽²³⁾ただ、その細部を見ると、異なっている点も多い。例えば、巨人の形状に関して、「シンドバードの物語」では肌の色が黒いとされており、また目も一つ目ではない。⁽²⁴⁾さらに、巨人のもとからの脱出にあたっては、「巨人の両目を潰す」というモチーフは両話で共通しているが、「巨人を酒で酔わせる」「羊を利用して脱出する」というモチーフは「シンドバードの物語」には見られない。

ところで、「シンドバードの物語」の成立がいつ頃であるかについては、未だ定説はみられないが、十世紀前後の時期である可能性が高いようである。²⁵また、「シンドバードの物語」は、一から創作されたものではなく、当時の船乗りたちの伝聞情報や中世のアラビア語地理書などを取り込みながら、成立したと考えられている。²⁶この話もまた、『オデュッセイア』を含む、各地の伝承が混ざり合つて成立したのであろう。

さらに、「シンドバードの物語」との類似がしばしば指摘される、十世紀後半に書かれた「ブルク・イブン・シャフリヤール『インドの驚異譚』」にも興味深い話が見える。簡単な概略は次の通りである。

バスラ²⁸の住民の一人の男が乗った船がザーバジュ²⁹もしく中国に向けて船出し、あちこちを訪れるが、あるときラーイム（ザーバジュ）の海域あるいはその近くのところで難破して、とある島に流れ着く。

その島で、仔牛ほどもある山羊二〇〇頭ばかりを放牧する男に出会う。その男は私が見たこともない大きな図体で、背も高く、胸が太い、醜い顔付きをしていた。その大男は男に気がつき、彼を連れて家に帰る。夜が明けると、大男はねぐらから下りてきて、羊と一緒に男も連れ出した。男の髪がかなり伸びていたので、その容姿にむかむかするほど不快な気分になって、それが理由で男を食べるのを

先送りしていたようであった。

こうした生活が二ヶ月が過ぎて、男の体も回復すると、大男の顔に安堵の表情が見えるようになり、大男はいよいよ男を食べることを決心したようであった。そこで、ある夜大男が酔つて寝入った隙に彼の元を逃げ出した。その後、巨鳥の脚にしがみついて縄で体を縛り、鳥と共に空に舞い上がつて一つの山に到り煙が立ち上がるのを見る。その煙りに向かつて歩くと、また再び人食いの住む村にたどり着き、捕らえられてしまう。そこには、別の船に乗つていて難破してしまつた八人の先客がいた。彼らと相談し、住民が酒に酔つ払つて寝入つた時に全員の喉を刺して、刀といくらかの蜂蜜などを奪い逃げ出す。海岸で偶然見つけた廃舟を修理して乗り込み、その村を出帆し、サンフの町を経て故郷のバスラに戻ることができた。それは彼が姿を消してから四〇年後のことであつた。³⁰

この話もまた、巨人の島への漂着譚であるが、大男が一人で羊を飼つて暮らしているというモチーフ、脱出にあつた動物（『オデュッセイア』では羊、『インドの驚異譚』では巨鳥）を利用するというモチーフなど、『オデュッセイア』との間に共通点が見られ、何らかの形で『オデュッセイア』の影響を受けていると考えられる。さらに、この話には、「シンドバードの物語」とも共通

するモチーフを見いだすことができる。⁹¹⁾

このようにみてくれば、少なくとも十世紀後半には、人食い巨人の住む島をめぐる話が、アラビア世界からインド洋にいたる広い地域で語られていたことは明らかである。そして、当時この海域は、海上交易の中心であった。とすれば、こうした巨人をめぐる説話もまた、船乗りや海上商人たちによって各地へと運ばれていったのである。そして、その海上交易の東の到達点に位置するのが中国であった。

最後にもう一つ、巨人では無いが「人間を食らう人が住む島」について付け加えておこう。『インドの驚異譚』には、巨人ではないが、人間を食らう人々が住む島について、しばしば語られる。⁹²⁾さらに、『インドの驚異譚』と同時期に成立したとされる作者不詳『中国とインドの諸情報』についての第一の書⁹³⁾にも、数多く人食いの住む島についての記述が見られる。こうした島々が、当時のこの辺りの海域には多く存在し、船で往来する人々にとって大変な脅威となっていたことがうかがえる。こうした情報もまた、海域交流を通じて、各地に伝わっていた。

では、こうした西方の説話と、中国の巨人説話とはどのように関わることになるのであろうか。

三 海域交流と巨人説話

八世紀半ばから十世紀にかけて、アッバース朝の首都

バクダードは、新しく成立した国際交易ネットワークを利用して活躍する商人たちの中心市場として繁栄を極めた。⁹⁴⁾先述した『アラビアンナイト』や『インドの驚異譚』は、こうした時代を背景にして編まれたのである。商人や船乗りたちは、木造帆船ダウに乗り、アラビア海とインド洋を越えて、東アフリカ海岸、インド、東南アジア、中国の諸地域に至り、各地の物産をバクダードにもたらすと同時に、西方の物産をまた各地へと運んでいった。もちろん、物だけではない。彼らの体験や伝聞した不思議な話もまた、こうしたネットワークの中で各地へと運ばれていったのである。

中国において、巨人の島への漂着譚の最も早い時期のものと考えられるのが、『紀聞』『新羅』の話であるが、『紀聞』の成立が八世紀半ばの盛唐時期であるのは示唆的である。おそらく「新羅」に始まる一連の巨人をめぐる説話は、当時興隆を迎えようとしていた海域交流の中で、海を渡り中国に伝わってきた話が元になっている可能性は極めて高いといえることができる。⁹⁵⁾

ただ、どのような話もたらされたのかについては、資料が乏しくよくわからない。最も形が整っている『夷堅志』『長人国』と、『オデュッセイア』『アラビアンナイト』『インドの驚異譚』を比較しても、細部は異なっている点が多い。『オデュッセイア』などが熱心に語る、巨人の元からの脱出の場面などは、中国説話では詳しく語られることはほとんどない。これは、伝わった話にそ

の部分が含まれていなかったからなのか、中国の人々がその部分に関心を寄せなかったのか、その点は想像するしかない。

また一方、「斧による巨人の指の切断」モチーフは、『オデュッセイア』などには見られないモチーフである。これは逆に、中国で加えられた新しい要素である可能性が高い。この切断した指は、『玉堂閑話』の記述によれば、献上され皇宮の蔵に収蔵されている。また、『夷堅志』「長人国」では、徐兢という当時の著名人が、この指を見たことがあることが記されている。これらは、話の真实性を高める働きを担っていると考えられる。中国における伝統的筆法でいえば、こうした話は記録として語られているのであり、巨人の指は、その話が真実を伝えていることを担保する、有力な物的証拠となりうる。語られた話が真実であることを示すために、中国ではこうした指の切断のモチーフが語られるようになったのではないだろうか。逆に、『オデュッセイア』等で詳細に語られる脱出の場面は、中国人にとってはあまりに荒唐無稽で、受け入れることが難しかったのかも知れない。こうした現実主義的な中国人の感覚が、結果として西方とは違った巨人の島への漂着譚を語ることに繋がっていたと考えられるのである。

四 東の海域と巨人の島

これまで見てきたように、巨人をめぐる説話は西方の

影響を受け、盛唐の頃より少しずつその内容がふくらみ、人々の間に広がっていった。しかし、その話は中国で古くから語られていた巨人説話と、関係が切れているわけではない。そのことを示しているのが、巨人の島の位置である。筆者はかつて、巨人の住む島の位置について検討を加えたことがある。詳細は拙論を参照していただきたいが、例えば最初にあげた『山海経』大東荒経に付された郭璞注を思い出して欲しい。そこでは、倭国の人々が遭難して、巨人の国に到っている。また、『紀聞』「新羅」では、「長人国」は新羅と東に接していると記されている。つまり、古来から中国では、巨人の国（島）は中国の東方、朝鮮半島から日本にかけての海域にあると考えられていたのである。

こうした「巨人の国（島）」をめぐる地理感覚は、新たな説話の中でも引き継がれていった。『紀聞』、『玉堂閑話』では、ともに新羅への使いの途中で遭難し、巨人の島へと漂着している。『広異記』「張騎士」においては、どの海域で難にあつたかは明確に記されていないが、張騎士が供をする李勳は高麗に遠征した人物であることから考えて、おそらく朝鮮半島めざして航海中の出来事であろうと考えられる。さらに、『夷堅志』「長人国」において、巨人の島から逃れてきた明州の人の話を聞いたのは、徐兢なる人物であった。この徐兢は、宣和五（一一二二）年に高麗に使いし、『高麗図経』四十巻を撰して奉り徽宗を喜ばせた人物である。この話でもま

た、巨人の島をめぐる朝鮮半島が見え隠れする。

以上のように見てくれば、「巨人の島」をめぐる西方由来の話が中国で語られる際に、その場所に関しては古くからの地理感覚を引き継ぎ、中国の東、東海から環日本海海域を意識していたということができるだろう。

では、この海域に位置する朝鮮半島には、巨人をめぐる話はないのであろうか。筆者は、朝鮮半島の説話に詳しくないため、あまり資料を持ち合わせていない。しかし、近年日本で翻訳が出版された朝鮮半島の漢文説話集である『青邱野談』には、「大人島商客逃殘命」と題する次のような興味深い話が収められている。

清州の商人が若い頃、嵐に遭つてある島にたどり着く。陸に上がつてみると屋敷があつたので、二十人ばかりで屋敷にかけこんだ。中には人が一人いた。そいつは、背の高さが数十丈、腰回りが十抱えもあるような大男で、真つ黒な顔にくぼんだ目、話す言葉ときたらロバの鳴き声みたいであつた。

巨人は入り口を閉ざし、若い奴を火で焼いて食べ、食らい尽くすと酒を飲んで眠ってしまった。みなは互いに相談し、みなで揃つて巨人の両目に刃物を突き刺した。大男は商人を捕まえようとしますが、目が見えないので捕まえられない。また、家畜の豚や羊を柵から出し、混乱に乗じて豚や羊を巧みに利用して脱出に成功する。

船に乗り込むと、別に三人の巨人も現れて、迫

かけてくる。あつという間に船まで寄つてきて、船縁をつかみかかった。そこで、斧を振るつて、彼らの指を切り落として、沖まで逃げた。

その後また嵐に遭つて難破し、自分以外はみんな死んでしまい、自分だけは通りかかった船に助けられた。ただ、海面を漂つていた時に、鯨に食われて両足を失つてしまった。³⁸

この話は、(i) 遭難と巨人との邂逅 (ii) 捕縛と食人 (iii) 脱出 (iv) 巨人の追跡 (v) 武器での抵抗と指の切断という構造になっているが、これは『玉堂閑話』『新羅』や『夷堅志』『長人国』と、全く同じである。とりわけ、「指の切断」が語られているのは興味深い。³⁹ また、(iii) の脱出に関しても詳しく語られ、そこには酒に酔つて眠つた巨人の目に刃物を突き刺すモチーフ、巨人たちの飼っている家畜を利用して脱出するモチーフなどが含まれており、ホメロス『オデュッセイア』や『インドの驚異譚』『アラビアンナイト』ときわめてよく似ている。⁴⁰

『青邱野談』は、金山郡守をつとめた金敬鎮(一八一五—一八七三)なる人物によつて、一八四三年に編纂された。⁴¹ 比較的近年に成立した書物である。また、野崎充彦氏によれば、『野談』の生成過程には、先行文献から得た既成の話形やモチーフの再編と、巷で身近に見聞した話の採録という二つが考えられるという。⁴² この「大人島商客逃殘命」も、著者である金敬鎮の完全な創作とい

うわけではなく、書物あるいは伝聞を元にして書かれた可能性が高い。ただ、この話が成立した背景については、現在のところこれ以上論じる材料を持ち合わせていない。もちろん彼が、『夷堅志』や『太平広記』といった中国の書物を読んでいた可能性は高く、「巨人の指を切り落とす」というモチーフが書承を通じて朝鮮半島に伝わっていたことは想像に難くない。一方、『オデュッセイア』系統のモチーフが、どのようにこの話に入っていたのかは、よくわからない。何らかの書物を通じて知り得たという可能性も低いように思われる。とするならば、二つの可能性が考えられよう。一つは、朝鮮半島で西方の伝承とは無関係に、同様のモチーフが語られていた、という可能性である。確かに、例えば「巨人の目に刃物を突き刺す」というモチーフは、「鬼の目つぶし」として世界各地で類話を見出すことができる。⁴³⁾この話も、そうした一例とみなすこともできよう。

もう一つの可能性としては、こうしたモチーフを含む話、もちろんそれは『オデュッセイア』『アラビアン・ナイト』そのものかどうかは問題ではない、がアラビア海からインド洋、そして東シナ海へと繋がる海域交流を通じて、中国経由で朝鮮半島に入った可能性である。筆者はこちらの可能性に大きな魅力を感じてはいるが、今のところ、話の類似以外に確たる根拠を持ち合わせていない。本稿では、可能性を示唆することに留め、引き続き検討していくこととしたい。

おわりに

以上、『夷堅志』「長人国」を軸として、中国における巨人説話の変遷を縦軸に、ホメロス『オデュッセイア』から『青邱野談』まで世界的に広がる巨人説話を横軸に考察を行ってきた。その結果、現段階では、次のようなことが言えるのではないだろうか。

(一) 中国において、古くから巨人をめぐる話は語られている。盛唐の頃になると、巨人の島への漂着譚が語られるようになり、徐々に内容が豊かになり、宋代の『夷堅志』へと繋がっていく。

(二) 一方、ヨーロッパからアラビア世界にかけても、ホメロス『オデュッセイア』をはじめとした、巨人をめぐる話が存在する。

(三) 西方の巨人をめぐる説話は、八世紀以降のアラビア世界と中国とを結ぶ海域交流の活発化に伴い、中国に伝えられ、何らかの影響を中国説話にもたらした。

(四) ただ、西方の説話を受け入れつつも、「巨人の指の切断」など、中国独自のモチーフも見られる。また、巨人の国(島)の場所としては、古代から一貫して、中国の東の海域が意識されている。

(五) 十九世紀に朝鮮半島で書かれた『青邱野談』「大人島商客逃残命」は、『オデュッセイア』系統のモチーフと、『夷堅志』系統のモチーフの両方を含む話である。ただ、『オデュッセイア』系統のモチーフが、ど

のようにこの話に取り込まれたかについては、まだよくわからない。同モチーフが朝鮮半島で西方と同じく語られていた可能性、あるいは海域交流の中で伝わってきた可能性が考えられる。

本稿では、巨人説話の中でも、主として「巨人の島」に焦点を当てて論じてきた。とはいえ、中国における巨人説話の一部分を取り上げて論じたに過ぎない。また、宋代以降の文献に見られる巨人については、全く触れることができなかった。今後の課題としたい。

注

(1) 『藝文類聚』卷一「天」(上海古籍出版社、一九六五年)

徐整三五曆紀曰、天地混沌如雞子、盤古生其中、萬八千歲。天地開闢、陽清為天、陰濁為地。盤古在其中、一日九變、神於天、聖於地。天日高一丈、地日厚一丈、盤古日長一丈。如此萬八千歲、天數極高、地數極深、盤古極長。後乃有三皇、數起於一、立於三、成於五、盛於七、處於九、故天去地九萬里。

(2) 任昉『述異記』(中島長文『任昉述異記』校本)『東方學報』京都第七三冊所収、二〇〇一年)

盤古氏之死也、頭為四岳、目為日月、脂膏為江海、毛髮為草木。秦漢間俗說、盤古氏頭為東岳、腹為中岳、左臂為南岳、右臂為北岳、足為西岳。

(3) 『漢書』卷二十七五行志七下之上(中華書局、一九六二年)

史記秦始皇帝二十六年、有大人長五丈、足履六尺、皆夷狄服、凡十二人、見于臨洮。天戒若曰、勿大為夷狄之行、將受其禍。是歲始皇初并六國、反喜以為瑞、銷天下兵器、作金人十二以象之。遂自賢聖、燔詩書、阬儒士。奢淫暴虐、務欲広地。南成五嶺、北築長城以備胡越、塹山填谷、西起臨洮、東至遼東、徑數千里。故大人見於臨洮、明禍亂之起。後十四年而秦亡、亡自戍卒陳勝發。

(4) 『列子』湯問篇(楊伯峻撰『列子集解』中華書局新編諸子集成、一九七九年)

而龍伯之國有大人、举足不盈數步、而暨五山之所。

(5) 『博物志』卷二(范寧校証『博物志校証』中華書局古小說叢刊、一九八〇年)

『河圖玉板』云、龍伯國人長三十丈、生萬八千歲而死。大秦國人長十丈、中秦國人長一丈、臨洮人長三丈五尺。

(6) 明代に編纂された百科事典『三才圖會』「長人國」の条にも、この話を簡略化した内容が記されている。これは、「長人國」の逸話が当時かなり知られていたことを示している。また、『夷堅志』には他にも、巨人が住む島を記した「長人島」「夷堅志」丙志卷六「海外怪洋」(『夷堅志』補卷第二十一)などがあり、とりわけ「長人島」は、この「長人國」と内容がよく似ている。志村五郎氏は、『中国古典文学私選』(明德出版社、二〇〇八年)において、この「長人島」の方を『夷堅志』中でもっとも整った巨人をめぐる話であるとされている。

(7) 『夷堅志』乙志卷八「長人國」(中華書局古体小説叢刊、二

〇一〇年)

明州人泛海、值昏霧四塞、風大起、不知舟所向。天稍開、乃在一島下。兩人持刀登岸、欲伐薪、望百步外有篠籬。入其中、見蔬茹成畦、意人居不遠。方躡踞摘菜、忽聞拊掌聲。視之、乃一長人、高出三四丈、其行如飛。兩人急走歸、其一差緩、爲所執。引指穴其肩成竅、穿以巨藤、縛諸高樹而去。俄頃間、首戴一鑊復來。此人從樹杪望見之、知其且烹己、大恐。始憶腰間有刀、取以斫藤、忍痛極力、僅得斷。遽登舟斫纜。離岸已遠。長人入海追之、如履平地。水財及腹、遂至前執船。發勁弩射之、不退。或持斧斫其手、斷三指、落船中、乃舍去、指粗如椽。徐兢明叔云嘗見之。何德獻說。

なお、本話については、高西成介・塩卓悟『夷堅志』明州關連記事訳注稿(中)、『高知県立大学文化論叢』創刊号、二〇一三年三月)において、詳しい訳注を施している。

(8) 『山海経』大東荒経(袁珂校注『山海経校注』上海古籍出版社、一九八〇年。以下同じ。)

東海之外、大荒之中、有山、名曰大言。日月所出。有波谷山者、有大人之國。有大人之市、名曰大人之堂。有一大人踰其上、張其兩耳。

(9) 『山海経』大荒東経、郭璞注。

倭國入嘗行、遭風吹度大海外、見一國、人皆長丈餘、形狀似胡。

(10) 『山海経』では他に「海外東経」にも「巨人の国がその北にある。その住民は大きくて、坐って船を削っている。別の

本では蹇丘の北にある(大人国在其北、為人大、坐而削船。一曰く在蹇丘北)」という巨人に関する記述がある。しかし「大荒東経」同様に、詳しい記述は見られない。

(11) 「新羅」(『太平広記』卷四八一引「紀聞」。なお、『太平広記』は、中華書局一九六一年版を利用した。以下同じ。)

新羅國、東南與日本隣、東與長人國接。長人身三丈、鋸牙鉤爪、不火食、逐禽獸而食之、時亦食人。裸其軀、黑毛覆之。其境限以連山數千里、中有山峽、固以鐵門、謂之鐵關。常使弓弩數千守之、由是不過。

(12) 「新羅」(『太平広記』卷四八一引「紀聞」)

この話は、「男性は食べられてしまい女性ばかりが留め置かれていて」、「人間が知恵を使い、酔った巨人の首を掻き切つて脱出する」など、興味深いモチーフを多く含んでいる。

(14) 「張騎士」(『太平広記』卷四五七引「広異記」)

(15) 「新羅」(『太平広記』卷四八一引「玉堂閑話」)

(16) 志村五郎『中国古典文学私選』(明徳出版社、二〇〇八年)一九七頁。

(17) 志村氏は「オデュッセウス」と表記されているが、本稿では参考にした松平千秋訳『オデュッセイア』(岩波文庫、一九九四年)の表記に従い、「オデュッセイア」と表記する。

(18) 西村賀子『オデュッセイア』(戦争)を後にした英雄の歌』(岩波書店、二〇一二年)第一部第二章、第四章。

(19) 志村氏は「キュクロプス」と表記されているが、本稿では松平千秋訳の表記に従い「キュクロプス」と表記する。

(20) 要約は、松平千秋訳『オデュッセイア』に拠った。

(21) ただし、このキュクロプスをめぐっては、ホメロスが当時流布していた民話を利用したものであるという。ホメロス以前に、すでに広範囲にわたって巨人をめぐる話は語られていたのである。中務哲郎『オデュッセイア』におけるポリュペモス譚について(『西洋古典論集』七、一九九〇年)等を参照。

(22) 『アラビアンナイト』には、さまざまなテキストが存在する。本稿では、『アラビアンナイト』の集大成とされるカルカット第二版を、『アラビアン語から直接翻訳した前嶋信次訳『アラビアンナイト』¹²』(平凡社東洋文庫、一九八一年)を参照した。東洋文庫版『アラビアン・ナイト』では、「海のシンドバードの第三航海の話」は、第五四六夜から五五〇夜において語られている。

(23) シンドバードの物語の中に、ホメロスの『オデュッセイア』の影響がみられることに関しては、この話がヨーロッパに紹介された当初から指摘されており、これまでも多くの議論が行われてきている。前嶋信次『アラビアン・ナイトの世界』(平凡社ライブラリー、一九九五年。元は講談社現代新書、一九七〇年)一二八頁〜一九五頁を参照。ただ、同書「解説」において、杉田英明氏は、「人食い巨人の説話も『鬼の眼潰し』として世界各地に類話の存在することが知られており、一概にこれをホメロスのポリュフェーモス説話とのみ結びつけられるかどうか、疑問が残る」(二四四頁)と述べられ、さらなる研究の必要性を示唆される。「鬼の眼潰し」に関しては、注(44)も参照。

(24) 巨人の肌の色に関してここで思い起こされるのが、『紀聞』新羅である。新羅国と東で接するという「長人国」の巨人は、身体が黒い毛で覆われていた。

(25) 例えば西尾哲夫氏は、『新装版図説アラビアンナイト』(河出書房新社、二〇一四年)八二頁において、「アラビアンナイト研究者であるミア・ゲハルトによれば、シンドバード航海記の原型が成立したのはほぼ九世紀末ないし十世紀のバクダードかバスラであり、十三ないし十五世紀のエジプトで加筆が行われたものである」と述べている。

(26) 西尾哲夫『世界史の中のアラビアンナイト』(NHK出版、二〇一一年)四四頁〜四五頁。

(27) 家島彦一氏は、次のように述べている。

『インドの驚異譚』は、インド洋海域の航海と交易に経験豊かな南イラン・フージスタン地方のラームフルムズ出身のナーフザー(船主兼船舶経営者)、ブズルク・ブン・シヤフリヤールが一〇世紀前半から後半にかけて、スイーラーフを拠点として活躍する、主にイラン系ナーフザー、ルツバーン(船長)、船員、海上商人、巡礼者、冒険を好む旅行者や修行者たちを通じて直接・間接に聞き取った奇談・説話や著者が目撃・体験したことを蒐集・編纂した書物であって、全体で一六二種の異なる驚異譚を集録している。(家島彦一訳『インドの驚異譚』はしがき、一二頁。平凡社東洋文庫、二〇一一年)

(28) イラク南部のティグリス川河口近くの都市。航海と貿易の拠点として重要な都市であり、『アラビアン・ナイト』「シン

ドバードの物語」でも、しばしば語られる。中国名は末羅国。『新唐書』卷四十三下地理七下にも、「又西一日行、至烏刺國、乃大食國之弗利刺河、南入于海。小舟泝流、二日至末羅國、大食重鎮也」と、その地が見える。

(29) スマトラ島付近。

(30) 家島彦一訳『インドの驚異譚2』第一四二話「ある難破者の辿った奇跡の長旅」(平凡社東洋文庫、二〇一一年)

(31) 家島彦一前掲注(30)訳書二〇三頁。

(32) 例えば、第三五話や第一三八話では、人間を食らう人々が住む「ザンジュ地方」の事が語られている。

(33) 家島彦一訳『中国とインドの諸情報1ー第一の書』(平凡社東洋文庫、二〇〇七年)。本書には、例えばニヤーンやアンダーマンという、人間を食べる人々が暮らす島についての記述が見える。二八頁〜二九頁。

(34) 家島彦一『海城から見た歴史 インド洋と地中海を結ぶ交流史』(名古屋大学出版会、二〇〇六年)六九〇頁。

(35) 海のシルクロードをめぐる中国と西方社会との物語の交流に關しては、これまでもたびたび論じられてきた。例えば南方熊楠は、『アラビアンナイト』を説話の東西比較においてさまざまに駆使している。(杉田英明『アラビアン・ナイトと日本人』岩波書店、二〇一二年。一六八〜一七三頁、三八八〜三九〇頁)中国においても、早くは錢鐘書が『管錐篇』太平広記二〇一卷四六六(『管錐篇』第二冊、中華書局、一九七九年。八二九頁)の条において、『太平広記』所収の大亀、大魚をめぐる話と『アラビアンナイト』の「シ

ンドバードの第一の航海」との類似を指摘している。また、劉守華に『《一千零一夜》与中国民間故事』、『《一千零一夜》与中国民間故事札記』(ともに『民間故事的比較研究』中国民間文芸出版社、一九八六年所収)がある。近年は、佐々木陸氏が、「唐代伝奇『崔煒』と広州の伝説」(『饜登』第二号、一九九四年)の中で、海のシルクロードと唐代伝奇小説との關係について詳細に論じられている。

(36) 拙稿「東海異界小考」(勝山稔編『小説・芸能から見た海域交流』汲古書院、二〇一〇年)、「中国古伝承のなかの海」(静永健編『海がはぐくむ日本文化』東アジア海域に漕ぎだす6、東京大学出版会、二〇一四年)などを参照。

(37) ここで言う「東海」とは、中国から見て東の海、具体的には渤海から東シナ海にかけての海を指す。

(38) 野崎充彦『青邱野談』(平凡社東洋文庫、二〇〇〇年)に拠った。なお、『青邱野談』の原文は未見であるが、本話と同じ話を林明德主篇『韓国漢文小説全集』卷八(国学資料院、一九九九年)が『海東野書』より引いており、そちらを参照した。

(39) この場面は漢文では、次のようになっていいる。なお、引用は『韓国漢文小説全集』に拠った。

暫時來立船頭、手着船閥、吾等以斧盡力斫其指、急急撻擗而來。

(40) 金寛雄、金晶銀『韓国古代漢文小説史略』(北京大學出版社、二〇一一年)二三〇頁において、本話「大人島商客逃殘命」と唐代「新羅長人」、及び『オデュッセイア』の相違に關し

て、簡単な指摘がなされている。

(41)野崎充彦前掲書「解説」三〇五頁。

(42)野崎充彦前掲書「解説」三〇八頁。

(43)例えば、日本における『アラビアン・ナイト』最初の翻訳は、

永峰秀樹訳『開巻驚奇暴夜物語』であり、一八七五年の出版である。また、中国で最初の『アラビアン・ナイト』の

翻訳が出版されるのは一九〇〇年前後のことであった。樽

本照雄『漢訳アラビアン・ナイト論集』（清末小説研究会、

二〇〇六年）及び杉田英明『アラビアン・ナイトと日本人』

（岩波書店、二〇一二年）を参照。『オデュッセイア』の翻

訳事情に関しては、全く資料を得られていない。宣教師等

によってその話が伝えられていた可能性も考えられるが、

現在のところ想像の域を出ていない。

(44) 榎沢厚生（^{ウーティス}誰でもない者）の誕生―民話の層から―（『無』人の

の誕生』所収。影書房、一九八九年、四五頁〜八三頁。初

出は、九州大学教養部『英語英文学論叢』33、一九八三年）

参照。この論文において榎沢氏は、多くの「鬼の目つぶし」

の民話を挙げおられ、朝鮮半島の話としては語り手不詳「脚

のない男」の概略が示されている。ただ、出典が明記され

ていないため未確認ではあるが、その引用されている内容

は、この『青邱野談』『大人島商客迷残命』とそっくりであ

る。

〇一三年二月二日、台北市電腦公會聯誼中心五〇五號室）
において、「巨人たちの海」と題して発表した内容を、大
幅に加筆訂正した上で改題したものであり、本稿をもって
最終稿とする。席上、多くの方から貴重なご意見を賜った。
ここに記して厚く御礼申し上げます。